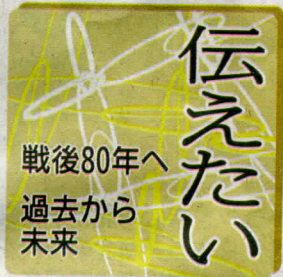


旧陸軍伊那飛行場フィールドワーク

戦争の痕跡 歩いて触れる

地元住民ら見学 平和考える



伊那市上の原にある旧陸軍伊那飛行場跡地を市民たちが実際に歩いて遺構を見学するフィールドワークが25日に開かれた。一帯は住宅や保育園があるのどかな光景だが、戦時中は滑走路や弾薬庫が整備されていた。同飛行場を研究する久保田さん(82)―上の原―の案内で子どもからお年寄りまで約20人が身近にある戦争の痕跡に触れ、改めて平和について考えた。

(小坂和史)



上の原保育園近くにある飛行場の格納庫跡地を見学する参加者ら

催しは生活クラブ生活協同組合長野伊那支部有志が昨年つくったサークル「平和WAVE」が企画した。同飛行場では1944(昭和19)年2月から訓練が行われていたが、終戦により解体。総面積は1500畝で滑走路は南北に長さ1・3キロあった。もとは畑や桑畑だったが住民は軍の意向を受けてやむなく手放した。整備には住民や学生だけでなく朝鮮人労働者も大勢動員されたという。参加者は上の原保育園南側にある格納庫の基礎を見学。劣化しているもののコンクリートの土台が厳然と残る現場を、久保田さんの解説を聞きながら見入っていた。引き続き民家の敷地内にあるレンガ造りの旧弾薬庫も訪ねた。

小学生の孫と参加した伊藤文明さん(74)は格納庫の跡地に「まだ残っていたことがびっくりでショックだった」と感想。「当時の人たちが生活のための土地を手放さざるを得なかった無念さを思うとやるせない」と話していた。

久保田さんは市内では西箕輪でも新たな飛行場建設が進んでいたことに触れながら「もう少し戦争が終わるのが遅ければ伊那に爆撃が行われることも考えられた」と指摘。「悲惨な経験を一度と繰り返してはならない」と言葉に力を込めた。